



2017年5月  
八潮FC・キャプテン 丸井 篤史

八潮 FC の皆さまへ

日頃から八潮 FC の子供たちのために、ご協力いただきありがとうございます。  
先日は八潮ファミリー運動会・リハウスリーグ後の納会に多くの方が参加して頂きました、  
学年を超えて保護者やコーチが交流を深める事ができたのかなと感じております。  
当日の準備や活動に協力していただき長い一日本当にお疲れさまでした。

話はかわり、今回通信 6 月号の頭に各ご家庭でご指導してくださいと一文をつけました、以下の内容です。

「好きなサッカーが出来るのは、コーチや父兄のサポートがあるからです。感謝の気持ちを忘れない！！」

いつか子供達がサッカーを通じてそういった気持ちになってくれればと発信し続けている言葉です。

ではサポートするコーチ・保護者の関係はどうでしょう？

うまくいっている事うまくいっていない事多々あると感じています、互いの言葉が TPO を意識しているのでしょうか？コーチからは「活動中は見守ってほしいのに・・・」保護者からは「この指導(指示)はどうなの??・・・」等色々な思いが飛び交っています。

八潮 FC の指導方針やオリエンテーション資料等にもありますが、八潮 FC のモットーである Let's enjoy Friendly Family Football を実行するにはコーチと保護者が良い関係であることが必要と考えています。

そこで保護者とコーチの関係についての記事がありました、コーチ・保護者お互いの理解を深める意味で長文ではありますが紹介いたします。

### ○まずはお互いを知ることから 保護者と指導者の良い関係への第一歩

保護者と指導者、子どもたちにとって身近な大人の存在は、ときに大きな力になり、ときにせつかくの成長を妨げる障害にもなり得ます。

「指導者の指導が子どもに合っていないと感じることが多い」「もう少し選手一人ひとりを見てほしい」

保護者アンケートでも、面と向かっては言えない指導者に対する不満が目につきます。

一方で、育成現場、とくに小学生年代の指導において問題になっているのが「保護者の過干渉」です。よく指摘される試合中の過剰な声援、コーチの指導を無視した技術指導、「自分の子どもがレギュラーから外されたのはなぜか？」と詰め寄る行為……。

冒頭にもお話したように保護者と指導者は子どもたちにとって最も身近な大人です。「環境が人を作る」と言いますが、サッカーがうまくなるかならないか、サッカーを通してより良い人間に育つかどうかは、サッカーをプレーする環境、つまり保護者と指導者の関係によって決まる！ と言っても過言ではありません。

この連載では「保護者と指導者」をテーマに、両者のより良い付き合い方について考えます。

#### ■指導者からのお願い「まずは見守ってほしい」

「子どもたちのために」その思いは同じはずなのに……。保護者と指導者の関係性はお互いへの理解が欠けていることから溝が深まってしまうケースが少なくないようです。

いずれにしても、お父さん、お母さんとコーチの間でその小さな心を痛め、板挟みになってしまうのは子どもたち。この問題は「指導者だけ」でも、「保護者だけ」でも解決しないのが厄介なところ。相互理解には、まずお互いの思いを知ることから。連載の第1回目は、それぞれがそれぞれの声に耳を傾ける場にしましょう。

#### 「できるだけ子どもたちを見守ってあげましょう」

指導者たちに「保護者へお願いしたいこと」を聞くと、必ず挙がるのが、この言葉です。指導者から保護者に一番伝えたいことが、この言葉に詰まっています。

「荷物を親が持ち、子どもは手ぶらでやってくる。『集合！』と声をかけると、ボールを持ってピッチの中までついてくる親もいる」

過保護にもいろいろありますが、保護者の行き過ぎた干渉が、子どもの自立を妨げるというのは、近年特に言われていることです。親が子どもの先回りをしてしまい、お膳立てをしてしまう。「自分のことは自分でやろう」と教えている指導者は、まず子どもと親を切り離すことから考えなければいけなくなります。

応援の際に熱くなりすぎる。レフェリーや相手チームを批判するなどの行為も子どもたちが取り組む「フェアプレー」とはほど遠い行為です。応援ですから、熱くなるのはわかりますが「審判、ちゃんと見ろよ！」「こんなチームに負けるな」という暴言が聞かれることも、いまだにあるそうです。

「シュート打てー」「走れー」

普段は「サッカーを知らない」と言っていたお母さんたちが、試合となると突如名監督に変身！？ 大声で選手に指示をはじめます。お母さんたちにしてみれば「応援」のつもりですが、優しい子どもたちはお母さんの「お願い」に耳を傾けてしまいます。指導者は「子どもたちのプレーや判断を尊重してあげてほしい」と声を揃えます。

### ■口出し無用？ でも手助けは希望？

一方、保護者は指導者に「サッカーのことは口出し無用」と言われてしまい、少し疎外感を感じている人もいます。両者の関係がうまく行っているチームでは「コーチはサッカー、保護者はそれ以外のサポート」という協力体制ができています。しかし両者の境界が曖昧なチームも多く、「意見を言うなと言われている気がする」「指導者がいつも正しいわけではない」と言った声も少なからず聞こえてきます。

どんな現場でもそうですが、特にジュニア年代のサッカーは保護者の協力なくして成立しません。当番や係を設けず、指導者だけで完結するように運営されているクラブチームであっても、何らかの協力を仰ぎながら「子どもたちのためにベストを尽くす」のが本来の姿でしょう。『口出しはしないでください』でも『協力はしてください』では、気持ちよく協力できない」という保護者の意見も、ごもつともです。

そこで重要になってくるのがコミュニケーションです。保護者と指導者の関係がうまく行っていないチームでは、保護者と指導者の話し合いがなく、見えない壁で隔てられているケースが多いのではないのでしょうか。本音を話す雰囲気も場もないチームでは、小さな不満がくすぶり続けることとなります。くすぶっていた火種がやがて大きな炎になる。そうなる前になんとか対策を講じなければいけません。

保護者の考え方と指導者の方針にあまりに開きがあり、チームが変わるという選択をしたというお話を、当事者であるお父さんから聞いたことがあります。親御さんは指導者の考えを理解しようと最大限の努力をしたそうです。それでもどうしても納得がいかにずい別のチームに移ることになったのですが「子どものために最善の決断だったのだろうか？」と、いまでも悩んでいます。

「子どもはチームに残りたかったのかもしれない」子どものためを思って下した決断でしたが、真逆の考えが頭をよぎることがあるそうです。「コーチと自分の対立に気づいて、子どもが傷ついたかもしれない」「もっとできることがあったのでは？」と自問する日々。

このお父さんは、どうしたら良かったのでしょうか？ 本当の意味で「子どものため」になる行動とはどういうものでしょう。

サカイク([www.sakaiku.jp](http://www.sakaiku.jp))より

とはいえ本音をぶつけるだけでは解決しない事もあります。

時間をかけてお互いを理解する事も大切かなと思います。

まとまりのない話で申し訳ありません、皆さまこれからも八潮 FC をよろしく願いいたします。

